
最硬の肉体を持つ一般人

放浪の焼きそば売り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最硬の肉体を持つ一般人

【Nコード】

N6125Z

【作者名】

放浪の焼きそば売り

【あらすじ】

耐久対魔対呪硬化EXの転生者がいたらどうなるか、という私の興味で書く二次創作です

主人公設定（前書き）

主人公の設定です。

食人鬼書かなきや……………

主人公設定

主人公名：玄武甲羅げんぶ かいら

性格：基本的にのんびりとしており、温和で争い事は好まない
でもぶつちんするとどっかから鎖で亀甲縛りした直径約1mで約7
kgの甲羅で攻撃してくる。

原作知識はうるおぼえ

魔術回路もない。だが使っている甲羅が神の加護を受けている為、
甲羅を使つての攻撃は当たる。

ステータス

筋力：E

耐久：EX

俊敏：E

幸運：C

宝具：？

保持スキル

硬化：EX

感想で指摘があつたので急遽つけたスキル。攻撃を認識しなくても
硬化して自身の身を守る。怪我もしないというお得

指摘してくれたお方に感謝

衝撃吸収：A

投げられた卵も衝撃では割れない。

硬いからどつちみち割れる。

対魔力：EX

魔術？なにそれ美味しいの？状態。

魔術師涙目

対呪：EX

呪いなんてなかった。と言わんばかりのスキル。

アンリマユエ……………

回復：C

常人離れした再生力。でも硬化EXだからエヌマエリシュやられなきやこのスキルは出番がない

えいえんのにばんて：EX

温和な性格故相手から攻撃を受けたりぶちぎれたりしないかぎり攻撃しない。

緑色の配管工と友達になれそうなスキル

主人公設定（後書き）

うひー今からプロログ書かなきゃ

誤字あったら指摘してつかあさい

戦闘員一名様、耐久の指摘有難う御座います

「そうですか？死体はどうになりました？私は一人暮らしで山にある家に引きこもっていたので気になります。」

「死体は……食品に入れられている防腐剤が体に溜まり死後硬直で縁側に座ったまま腐らずに、仲良くしていた野生の動物以外は10年間誰も気付かず放置されていました。」

「そうですか、森のみんなは気付いてくれましたか。」

「動物達は大丈夫でしょうかねえ、時々餌を上げてましたが……」

「じ、自分が何故20代の若さで自然死したのか気にならないんですか？」

「20代で死んでもそれは自然の摂理ですからねえ」

「それにしてもなんで20代でこんなに老成したんでしょうかねえ」

「そ、そうですか……あ、実はまだ死ぬべきではなかったので転生して頂きたいのです……」

「転生……輪廻転生の類でしょうか。……そういえば」

「あなたの誰ですか？私は玄武甲羅です。」

「あ、これはご丁寧に……神の石柱のアマテラスです。………つてちがー……うー！！！！！！！！！！」

「なぜ吠えているのでしょうか……熊の滝太郎（5歳）を思い出しますねえ」

「いやあ、親とはぐれたあのこを育てるのは大変でした。私が23歳の頃に……」

「あなたには転生してもらいます！それとチートもつけます！」

「ち、ちいと？ああ、私がまだ高校生の時に聞きましたねえ。あの時はくろれきが多かったですねえ……野良猫に富士山とつけたり、野良犬にお米とつけたり。ああ、そういえば釣った鰻にイワナとつけましたねえ……」

「き、聞いているんですかあ！？」

「聞いていますよ。只昔を懐かしく思っているだけですよ。」

「……28なのになんでこんなに枯れているんですかあなたは……」

「……」

「なんででしょうかねえ……」

「もういいです。それでチートですが」

「あらゆる攻撃とかをくらってしまっても大丈夫な肉体が欲しいですねえ。滝太郎と遊んでいる時に怪我をしてしまいましたし。」

「わかりました（多分EX級でやっと切り傷やしもやけ、やけどになつて魔力とかを無効化、衝撃を吸収する肉体が欲しいんですよ

……）」

「？」

なにかとんでもないことになりそうですが……まあいいです。

「おまけに武器でもあげます。暴走した動物を鎮静できるように」

「ん〜でしたら鎖がいいですねえ。前に滝太郎が暴れた時に縄では抑えることができませんでしたから。」

「はい、わかりました。それではよい世界を」

「第二の人生ですか。楽しみです。」

「あ、テンプレで穴が開きます。」

え？

パカッ

「なんということでしょうおおおおおお……」

……」

「匠の技で見事に落ちていきました……って何を言ってるんですか
私は」

ブローグですねえ（後書き）

劇。ビフ。ーアフターが作者は好きです

そういえばアフターのときに流れるピアノの曲の名前はなんでしょうかね？私は知らないのです。

つきましたねえ（前書き）

通知表……3が4つしかありませんでした。
あと全部2つて……高校、大丈夫かな

つきましたねえ

「……………おおおおおおおおお！！
いたっ！」

な、なんで穴なんでしょうか……それに何故私は怪我を……ああ、
そういえばがんじょうな肉体からだをもらったんだした。この年で物忘れ
は勘弁したいです。」

ころころと笑い自分がどこにいるのか玄武は推測する

（ここは……見たところ森でしょうね……。ですが動物の気配が
ありませんね）

森で動物の気配がない。というのはおかしかった。たとえ冬で冬眠
していても微かな気でわかる。

（ああ、雪ですねえ。私のところでは雪が多く積もって大変でした。
）

しかしそこで違和感

（はて、何故寒くないのでしょうか。）

そう、寒くないのだ。死んだ時に秋とはいえ服は冬では寒いだろう
と思われる服なのに

アマテラス
（甘寺素さんのおかげでしょうか。これはありがたいです。）

この男、神話は全く知らないのだ。おまけに山で籠もって自給自足
の生活をしていたため機械類に疎い。その疎さはどこぞのうっかり
並みだ。

「そこにいるのは誰ですか！！ここに何の用だ！！」

「おやあ？」

声をした方を見ると黒一色の服を着て何か武器を構えてるように見
える少女がいた。

「私は玄武甲羅ですよお」

「何をしにきたかを言いなさい！！」

「んゝ森の気配を探っていました。」

「ッ！貴様マスターか！！」

「ま、ますたー？」

「惚けても無駄だ！！」

そう言い切りかかるようにくる少女。

そして不可視の剣が玄武に直撃する。

「ボケてないですよ。まだ私は28歳です。それと、今の音と私の頭の何かが当たったようなのは何ですか？」

直撃するが無傷。しかも攻撃されたことに気付いていない。

「ッ！？」

少女はうつろたえたがやはり歴戦の騎士。すぐに思考を回復させて次の攻撃を行う。

ストライクエア
「風王鉄鎚！」

（この男はおかしい。何の魔力もないのに私の剣を受けきったことが。ならばここは一時引いて……）

そして空気の塊は玄武に当たり

「？」

霧散した。

「そ、そんな……」

ここで黒服の女騎士の直感が働く。

（この男はおかし過ぎる……エクスカリバーを受けきったりストライクエアを霧散させたり……メイガス（魔術師）か？だが演技には見えない。）

「あの、あなたはメイガスではないのですか？」

「めいがす？なんですかそれは」

「そうですか。ではここに来た理由は？」

「森に動物の気配が一切なかったので気になって来たんですよ。」

「やはり……一般人でしたか。」

「？ところでその剣はあ？さっき持ってなかったようにみえましたがあ」

「えー！？ああこれは……そ、そう手品です！！！」

「ほへへ、すごいですねえ……」

（あ、危なかった。もしこの男が頑丈でなければ一般人を殺してしまふところでした……）

「ところで、森を抜けるにはどうしたらいいのでしょうか？」

「へっ？こ、こっちです。」

「有難う御座います。」

（これは無視されていても切継に報告した方がよさそうですね……）

「（切継、一般人が森に迷いこんでいたので森の外へ案内します。）

」

「（……）」

（やはり無視ですか……）

騎士の少女とそのマスターの溝は深くなっていく

つきましたねえ（後書き）

最初英霊にしようかと思ったんですが……一般人なので一般人のままいこうと決めました。

食人鬼の方もちゃんと投稿します。

誤字があれば報告してください。

衛宮さん視点ですねえ（前書き）

一般^{サブ}人が食人鬼^{メイン}のお気に入り件数越えました。
……泣こう

衛宮さん視点ですねえ

ーペロリスゲフンゲフン…

ー某テロリストー

有り得ない……魔術師でもないのにセイバーの一撃を受けきった…

…！？

本当にサーヴァントではないのか……？

それに攻撃されたことに気づいていないなんて……いや、僅かに攻撃される前に顔をしかめた。

殺気を感じてはいるようだ。

こんな一般人がいるのだろうか……結界の外側でかかったのではなく内側で反応した……。つまり何もない空間からそこに現れた。魔法使いか？ いや、魔力は感じない。

……止めだ。この男は謎過ぎる

サーヴァントの攻撃を無効化するなんて封印指定並みだ
危険なものは早めに……

「ねえ切継、どうしたの？」

「なんでもないよ、イリヤ。お、またクルミを見つけたぞ。」

「え！？どこどこ！？」

「あはは、あれだよ、あれもクルミの一種。でも食べることは出来ないんだ。」

「むー！切継ずっとズルしてたあー！！」

「はは、ごめんよイリヤ」

「（マスター、一般人が森に迷い込んだようなので森の外に案内してきます。）」

セイバーから念話^レがきた。でも僕は

「……………」

無視した。道具に感情はいらない……。

衛宮さん視点ですねえ（後書き）

行間をあけたほうが読みやすいとありましたのであけてみました。

読みやすくなってでしょうか……………？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6125z/>

最硬の肉体を持つ一般人

2011年12月21日11時14分発行